子の恩を知つて

東京女高師教授　金子彦二郎

×

彼が學生時代に好んで歌つた、七里ケ濱の遭難學生のみ靈に捧げられた唱歌に、

　み空に輝く朝日のみ光り
　　暗きに沈む親の心、
　黄金も寶も何しやは集めむ
　　歸れ、早く母のみ胸に……

といふのがあつた。それはたゞ同じスポーツの方面に遊ぶボートメンの一人として、又その一種言ふべからざる哀しい旋律を辿ることに悲壯美を感じてのことであつて、そこに流露してゐる「親ごゝろ」などには殆ど沒交渉であり無關心なのであつた。それは丁度尋常一、二年の黄口兒が、「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」といふ偈の意を寓した、穢土を厭離し、光明土（極樂往生）を欣求する悲觀的人生觀の讃美歌たる「いろはにほへど散りぬるを…」の今樣を平氣で暗誦してゐるのと同じ心持で……。

彼も要するに、衝突してから始めて「あいたッ……」と涙を沁ませつゝ柱を怨めしげに睨み返すボンクラでしかなかつた。だから子を持たないうちは、やつぱし親の恩も知らねば子の恩も知らない心の近視眼者であつた。

×

時が移つて、月並な人間の營みが彼の身の上にも次第に展開していつた。

彼は夫といふものになつた。何もかも七輪と二枚のお盆で始末の出來る貧乏世帶も張つた。さうして滿一年一箇月目には、今まで男であり、夫でしかなかつた彼は、更にも

う一つの稱號を加へねばならなくなつた。それは五十歳六十歳の親爺盛りの人、嫁にやるやうな娘や中學に出す息子の二三人も抱へ込んでおく頭の禿げかけた男性だけに冠せられるものと今日が日まで合點してゐた「父」といふ鹿爪らしい尊號であつた。「この若さで、このやんちやが『父』かと」擽つたい心で一ぱいであつた彼は、彼の妻から「一寸だつこしてゐて……」と言はれて驚いて二三尺も飛び退いて、どうしても抱いてやらうとはしなかつた程、父らしい父ではなかつた。それは彼の最大な創作物に對して愛を感じなかつた譯でもなければ、抱きかゝへることが厄介だといふのでもない。只一途に恥しく、氣まりが惡かつたのである。だから、彼自身のこの氣恥しさに比べて、彼よりずつと年下で、恥しがりやの彼の妻が、平氣で「ママちやん」らしく振舞つてゐるのを見て「女てものは、何といふ圖々しいものだらう。先天的に母たるべく出來てゐるんだ。」などゝさへ思つてゐた。

父ちやんと呼ばれる年になつたかと、茶目けの多い我をほゝゑむ。

これが其の頃の述懐であつた。

×

平和な六年の歳月が平板に流れた。さうして彼もだん〳〵父らしい人になつて、口にするさへ甚しく氣恥しがつてゐた「父ちやん」と言ふ名詞を、自稱的に使つて

「さあ、父ちやんのとこへお出で」

などと臆面もなく言つてのけ、骨ばつた太い腕に抱擁してやるだけの勇氣と、父性愛の表現とを敢へて爲し得るに至つた。併しこれらの心持も、まだ〳〵眞箇に徹したものではなかつたといふことが、後でわかつた。子を持つて知る親の恩——子は持つて見たが、まだその生活が餘りに平板であり、單調であつたが爲に、「子つて可愛いゝもの」といふだけの上辷りな、魂の核心にまで突き入つたものでなかつたらしい。それで、續いて世に出て來て、食卓のもう一角を占領し、戸籍面に今一行賑やかさを增させる小さき者の生れ出なかつたことを、寧ろ幸福とさへ思つてゐた。彼のホームは、やがて

一隅の缺けて淋しき雜煮かな。

といふ詠歎が洩されるまで、六年間といふもの、いつまでも 2+1=3 といふ等式に變化も持來されなかつた。

×

突然に黑い冷たい死魔の手が、2+1=3 の等式をたゝきこはして、3−1=2 といふ淋しい暗いホームに縮少してしまつた。後で加つた小さな生命が六歳を一期として、大君の爲には千代八千代と壽ぎ祝ふ天長節祝日の、祝の歌のまだ消えやらぬ餘韻のうちに、小さき芽生えがかすかな息吹を絕つてしまつたのであつた。

3−1=2 とは、形骸の上のこと、心の生活から見れば實にこの等式は 3−1=0 とさへ言ひたい不合理な等式を結果したのであつた。「掌中の珠を奪はれる」といふ譬喩はどこの馬鹿者の寢言ぞ。彼にとつては實に今まで滿々と膨らめるだけふくらんでゐた風船玉から、すつかり中の瓦斯を拔きとられた以上の大退轉が感じられた。彼の家庭からは照る日の光が奪ひ去られた。春風の優しい息吹も酷寒の夜嵐以上に冷く吹いた。生存の凡ての意義がすつかり消滅させられたやうに、重くるしい頭と、靑黑い頰とをもつた彼等夫妻の顏には、光澤のない瞳があらぬ方のみをみつめつゝあるのが認められ、首が胸の中にまで陷沒するかと思はれるやうな溜息のみが朝に晝に夕に繰返されてゐた。さうして亡き兒を戀ひ慕ふ切なる思は、ともすれば「親の恩」の理解を子に對して要求し、人にも說き、人の說をも肯定してゐた因襲的な道德觀をがらりと破棄させてしまつて、親は、むしろ子に對して愛し何物を以てしても代川することの出來ぬ愛を感ぜさせて貰つて居り、且其の愛を感じてゐることによつて最も幸福に生きてゐる——の恩に對する報謝の念をこそ捧げねばならぬ者であるとの異常なる見解さへ樹立させて來たのであつた。子こそは親の恩人である。かう思ひつくに至つて、はじめて子の有難さ、可愛さといふものが本當に體得され、世俗に「死んだ兒は親に對する高僧智識である」と謂つてゐる語の眞義も了解出來たのであつた。その頃のうたに

夕されば門　に立ちて我待ちし
小さき影よいづちさまよふ。
七たびもとはをこがましあゝせめて

二度なりと生きて來よかし。
この百日斯くてもあられけるよなと
淋しき生をかへり見しはや。

かうして樂しかるべき朝餉夕餉の差向ひの食膳も、小さな影の一つが一角から消え失せてしまつた許りに、何等の興味もそゝらず、黙默のうちに茶碗が授受され、亡き魂が嗜んだシチューも、音を祕めて啜られ、投げ出すやうに置かれた箸の音のみが、わざとらしい空虛な嘲笑を響かせるのであつた。陰慘な濕つぽいそして小さな佛壇から匂ひ出る抹香の香で濁濁された佗びしい生活が、三年といふ長い年月彼の身を心を引ずりまはしたのであつた。

それは餘りに辛い天帝の試錬であり、餘りに長い岩戸どもりであつた。

×

救はれる日がやがて彼の上にめぐつて來た。子の恩に隨喜し、子の愛に飢えてゐた彼の上に、生ける魂の光が惠まれた。彼の心は法悅の境地に優游してゐる。よしや朝の副食物ががんもどきのにしめと菜つぱの糠味噌漬であらうとも、狹い寢室に斜に仰臥してゐる小さき者の爲に、隅つこに押かたまつて、時々には半分壁の上にせり出さねばならなくなつても、そこに寧ろ多くの滿足と愉悅とを見出してゐる。「黄金も寶も何にしやは集めむ。」さうだ〳〵。人間は先づ生きねばならぬ、その生きねばならぬのも子ゆゑにこそ。「子なければほんたうに生きてゐるんではない。一種の微妙なからくりを持つた體のよい消化機關でしか無いのではなからうか。」などとさへ思つてゐる。さうして時折、口の利けない幼兒に向つて、

「これ坊やお前は俺の恩人やぞ。」

と言つて見たりしてゐる。彼はかうして生くるを値ひした生活に心からひたり込むやうにエンジョーイしてゐる。

×

彼はこの記錄の後に、誰やらの言葉から暗示を得た次の言葉をどうしても附け加へずにはおられぬといふ。曰く

……世間の人は、私の長たらしい涙の記錄を馬鹿々々しいと思ふに違ひない。なぜなら「愛兒の死などは、そこにもこゝにも、又昨夜も今朝も、只今も、飽き果てる程夥し

く存在する事柄のほんの一つに過ぎないから。さうしてそれしきの事を重大視する程、世の中の人は閑散ではないから。」と。けれどもそれは正しい人間らしい心の持主の言へることではない。さう言つて侮蔑の色を見せるやうな人も、きつと一度かういふ事件に直面して見ると、愛兒の死をば何物にも代へがたい、悲しく口惜しいものに思ふ時が來るに違ひない。だから、今、世の中の人が無頓着でゐたつて、それに恥ぢることはない。又恥ぢてはならない。私たちは其のありふれた事實の中からも、人生の淋しさに、強く深くぶつかつて見ることが出來るのである。して見ると、謂はゆる小さなことが小さなことでもなく、謂はゆる大きなことが大きな事でも無い。それは要するに心一つの問題だから……　一四、一、三〇

東京保育協會の設立

記者

昨年來東京府視學横島常三郎氏東京市視學田中三郎氏等の盡力によつて東京保育協會が愈々設立せられました。會長には文學博士林博太郎伯が推薦せられました。林伯爵は普通の名譽會長とは大に異ひ御多忙にもかゝはらず率先保育事業の進展を期せられる筈であります。また林伯令夫人は年來保育事業に深き趣味を有せられる方でありますから一層東京保育協會のために御盡力になることゝ思はれます。私は我が國保育事業の進歩發達のために東京保育協會の設立せられたことを衷心より祝賀するものであり同會の益々發展することを國家のため希望して止まないのであり